鐘

内田康夫

鐘（かね）
内田康夫（うちだやすお）
© Yasuo Uchida 1994

1994年11月15日第1刷発行
1996年8月9日第6刷発行

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01
電話 出版部 (03) 5395-3510
販売部 (03) 5395-3626
製作部 (03) 5395-3615
Printed in Japan

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——凸版印刷株式会社
製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。（庫）

ISBN4-06-185810-6

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

講談社文庫

鐘

内田康夫

目次

プロローグ――7
血塗られた鐘――12
琴平電鉄――43
おかしな美談――97
北へ――162
越中万葉の里――218
鐘紋のルート――263
あしつきの乙女――284
高松の寺――335
七番目の鐘――374
鳴らずの鐘――421
諸行無常――447
エピローグ――487
自作解説――490

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

鐘（かね）

プロローグ

弓岡正にとっては、第十レースのはずれが文字どおり致命的であった。

ガチガチの銀行レースのはずが、五千円以上の穴になった。どう転んでも2―7で決まり。それ以外には推理のしようがなかったから、二十万円を一本買いに出たのに――である。

馬券を買うとき、オッズには四・六倍と表示されていた。悪くても九十万はかたい。その半分を第十一レースに突っ込んで勝負――といくつもりだった。

発馬直前になって、オッズは五・二倍まではね上がった。弓岡は北叟笑(ほくそえ)んだ。ばかなやつがいるものである。四・六倍ではつまらないと見たのかもしれない。

念のために新聞を眺め直したが、2―7以外のメが出る要素は何もなかった。よし、もらった、これで百万だ。十一レースはどうでもいい――。

弓岡の推理どおり、四コーナーを回ったところまでは、2―7ですんなり決まるレース展開できていた。しかし、そのときに弓岡は不吉な予感を抱いた。過去に何度となく、こういうパターンで裏切られた経験のあることを思い出した。府中の直線はべらぼうに長い。

案の定、しんがり近くにいた関西馬が、大外から一気に突っ込んできた。出馬表を見たとき、栗東の坂道で鍛えられたバカ脚が少し気にはなったのだが、過去にまるで実績のない馬だけに、軽く見ていた。

「ばかっ、来るなっ！」

弓岡は怒鳴った。その声を嘲笑うかのように、2も7もズルズルと後退して、入線したときには三、四着に落ちていた。

「確定するまでは、勝馬投票券はお捨てにならないでください」

場内アナウンスが最後の望みであった。一、二着馬が揃って失格するなどということは絶対にあり得ないと思いながら、汗みどろの掌で馬券を握りしめていた。

だいたい、二十五パーセントもピンはねする現在のシステムがおかしいのだ――と、弓岡ははらわたが煮えくり返る思いがした。客は最終的には必ず損をするようにできている。なけなしのカネをはたいて馬券売場に並ぶ客たちを踏み台にして、中央競馬会と厩舎と騎手たちと、関係者ばかりがわが世の春を謳歌しているのだ。

府中に住んでしまった身の不幸も嘆いた。競馬場まで、自宅から歩いて十分の距離であ

る。仲間は羨ましがるが、実情は地獄だ。まるで悪魔の手の内で暮らしているようなものである。金輪際、競馬はやめた――と誓い、どんなに逃げようとしても、風に乗って聞こえてくる実況放送を聞くと、足のほうが勝手に歩き出す。気がつくと、いつのまにか群衆と肩を並べて門を入ってゆく。

養子の身分だから、金策には苦労した。もっとも、妻は競馬そのものには反対しない。理由は、彼女の亭主は競馬の天才で、絶対に損をしないからである。

弓岡は長い年月をかけて、そういう「神話」を作り上げた。いや、実際、最初のころは妙に的中率がよかった。ビギナーズラックというのか、はじめて買った馬券が万馬券だったことが、弓岡を悪魔の道に引きずり込んだ。その後も、そこそこの成績がつづき、弓岡自身、自分は天才ではないか――と思った。たとえ負けた日でも、帰宅すると必ず、弓岡は妻に「配当」を与えた。何千円から、ときには万の単位の配当金を手にして、妻はほくほくであった。

とはいえ、所詮は競馬で儲けるやつはいないのである。弓岡の「神話」がそう長続きするはずもなかった。プールしておいた資金も枯渇して、弓岡はしだいに店のカネに手をつけるようになった。酒屋の売上げはかなりの部分、ドンブリ勘定で、多少の融通はつくものである。

だが、それもしだいにボロが出始めた。妻とその母親が、不審に思うようになった。棚卸

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

しの際に数字が合わないと言いだした。

仕方なく、弓岡は街の金融業者から資金を借りることにした。これも当初はうまくいき、借金はすぐに返済できた。しかし、二度目の資金は一日で半減した。一度つまずくとまさに蟻地獄であった。カケ売りの集金を利息の支払いに当てたりしながら、なんとか帳尻を合わせてきたが、限界は見えていた。このままいけば、遠からず、コワモテの借金取りが押し掛けてくる事態を覚悟しなければならない。

五月三日、弓岡はこれが最後――とハラを決め、三十万のカネを作った。九レースまでは遊びのつもりだ。狙いは第十レースであった。過去に何度も儲けさせてもらった二頭が出馬する。二日前から検討に検討を加えて、これぞ銀行レースと確信した。

ふしぎに、破綻(はたん)は考えなかった。

結果が確定して、2―7のメが完全に消えた瞬間も、弓岡はまだ悪夢を見ているのだと思い込んでいた。

ポケットには最後の一万円札が残っている。十一レースで万馬券を取るしか、弓岡の生きる道はなかった。百分の一の確率に賭けて、思いどおりの結果が出るとは、さすがの弓岡も思わなかった。

（どうする……）

胸のうちで呟いた。

「ちきしょう！」
隣にいた男が、週刊誌を椅子に叩きつけて立ち上がった。一緒に飛び散った馬券のほとんどが「2―7」であった。男の怒りと悲しみが弓岡には身にしみた。
週刊誌のページが風でパラパラとめくられた。弓岡は顔を伏せて、ぼんやりと記事を眺めた。
（あっ――）と思った。
――殴られた善意――
そういう見出しで、自殺男を引き止めようとして、殴られ、全治二週間の怪我をした男の話が載っていた。
天啓のようにひらめくものがあった。弓岡は週刊誌を拾って、立ち上がると、ポケットの一万円の存在を確かめた。少なくとも、片道の旅費ぐらいにはなる――と思った。

血塗られた鐘

その鐘が鳴ったとき、浅見光彦はリビングルームにいた。母親の雪江未亡人が部屋を出て、ようやく気詰まりな状態から解放された、ほんの一瞬後のことである。

雪江と浅見が、こんなふうに二人きりで顔突き合わせていることはめったにない。一つ屋根の下に住んでいて、しかもれっきとした実の母子でありながら――である。

浅見光彦にとって、母親の雪江がこの世の中で最大の天敵だ。三十三歳にもなって、いまだに親の家から脱出できずにいる、いわば居候の身分では、母親のひと睨みに出くわすのがいちばん恐ろしい。

浅見家はとっくの昔、長男の陽一郎夫婦の代に入っている。したがって、雪江としても、出来の悪い次男坊がいつまでも長男の家に厄介になっている状況には、常日頃、心苦しく思っているのだ。

母親が次男坊の顔を見るたびに、心ならずも、ふた言めには「早く正業に就いて、独立しなさい」と叱咤したくなるのも無理はないし、いくら叱咤してもされても、いっこうに効果が上がらない歯がゆさは、母子共通の悩みなのであった。

だから、雪江も浅見も、おたがいになるべく二人だけになる機会を避けるようにしている。こんなふうに深夜、リビングルームで二人が取り残されるのは、出合い頭のようなアクシデントといっていい。遅く帰宅した浅見が、お手伝いの須美子に頼み込んで、やっとこお茶漬けにありつけたばかりのところに、「須美ちゃん、ピップエレキバン、貼ってちょうだいな」と雪江が現れた。

須美子はついさっき、浅見のために風呂の支度に消えた直後だったから、否応なく、気まずいニアミスが成立してしまった。

妙なもので、こうなってみると、どちらもあわてて自室に引っ込んでしまうわけにはいかない。いってみれば、敵に後ろを見せるのを潔しとしない気分である。

浅見のほうはまだしも、お茶漬けに専念していれば格好がつくけれど、ピップエレキバン待ちの雪江は手持ち無沙汰きわまる。凝った首筋を押さえて、「もう十一時を回ったのねえ」などと、意味もなしに愚痴っぽいことを言った。

「すみません」

浅見はとりあえず謝った。

「おや、なにも、文句を言っているわけではありませんよ。男の子はむやみに詫びるものではないの」
「はあ、すみません」
「だから、それが……ほらほら、ほっぺにご飯粒がついてますよ。そこじゃなくて……いやだわねえ、いい歳をして」
雪江は溜め息をつき、これ以上は付き合いきれないと言いたげに腰を上げ、部屋を出て行った。
そのとき、かすかに鐘の音が聞こえたのである。まさに陰にこもった鐘の音であった。
浅見はゾーッとした。このテの現象に弱い男だ。この世の中では雪江未亡人についで、お化けが怖い。草木も眠る丑三つ刻になると、魑魅魍魎が蠢きだす――というのをまともに信じている。
相手が人間なら、どんなにひどい目に遭っても、せいぜい殺される程度までだが、これがお化け・幽霊のたぐいだと、何をされるか分からないところが恐ろしい。
第一、いくらドアに鍵をかけようと、お構いなしに入り込んでくるところが凄い。夜中にトイレに行って、ドアを開けるとそこに得体の知れぬ「何か」がいる――と想像しただけで、背筋がゾクゾクする。
あのドアの向こうにだって――と思ったとたん、そのドアが開いて白髪の鬼婆ならぬ雪江

未亡人の顔が現れた。
「いま、鐘が鳴らなかった？」
雪江はこわばった表情で言った。声がうわずっているところを見ると、よほど怖かったにちがいない。そうしてみると、怖いもの知らずのような猛母にもウィークポイントはあるらしい。
「ええ、鐘の音のようでした」
「鐘ですよ、間違いないわ……聖林寺さんかしらねえ」
「たぶんそうでしょう。この辺で鐘のあるお寺はあそこだけです」
「だけど、聖林寺さんがなんだってこんな時刻に……変だわねえ……」
「はあ、変ですね」
東京では、除夜の鐘か緊急時でもないかぎり、夜中に鐘を鳴らすことはない。いや、日中だって、滅多に鐘の音を聞くことは出来ない。むろん騒音防止条例のせいである。
その鐘が鳴った。鳴らないはずの鐘が鳴った。そこにいるはずのない人がいたり、ドアの向こうに何かがいたりするのと同様、これは不気味だ。
「それに、なんだか陰気くさい、いやな音じゃなかったこと？」
「ええ、ずいぶん小さく聞こえました。風向きの加減でしょうかねえ」
「風なんかありませんよ、あれは撞き方がおかしいのですよ。聖林寺さんからこの家の方角

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com